

チャイコフスキー Peter Ilyich Tchaikovsky(1840-1893)

交響曲第5番 Symphony No.5 in E minor Op.64(1888)

チャイコフスキーは、《交響曲第4番》op. 36 (1877)を作曲してから11年の間に、〈弦楽セレナード String Serenade〉op. 48 (1880)や〈序曲「1812年」Overture “1812”〉op. 49 (1880)、《マンフレッド交響曲 Manfred Symphony》op. 58(1885)など、交響的作品の傑作を多く書いた。チャイコフスキーがこの《交響曲第5番》に着手したのは、彼が初めてのヨーロッパでの演奏旅行を行っていた最中の、1888年5月である。この演奏旅行が大成功を収めたことは、彼が再び交響曲へ取り組むきっかけとなった。

この《交響曲第5番》は循環形式 Cyclic form の構成を取っている。《交響曲第4番》と同じく、冒頭で呈示された主題が他の楽章でも再現されるのであるが、この交響曲においては、第1楽章の冒頭で呈示された循環主題が、全楽章において、非常に重要な役割を担っている。

I. 穏やかに-快活に、動きを持って-さらに極めて落ち着いて Andante - Allegro con anima - Molto più tranquillo

第1楽章は主調のホ短調による、序奏付きのソナタ形式である。4分の4拍子の序奏部において、弦楽器の伴奏で、クラリネットがこの作品の循環主題を奏する。ホ短調の5度の和音で反終止し、8分の6拍子の呈示部へと移る。第1主題はクラリネットとファゴットによって静かに、そして厳かに呈示される。続いて、木管楽器によって反進行が印象的な和声による第2主題が呈示される。第2主題呈示部では、その主題だけでなく、5度下降のモチーフと、シンコペーションとヘミオラによってワルツのように聞こえる、第1楽章における2つの重要なモチーフが、ニ長調で呈示される。斉奏によって一つの小さな頂点を迎えたのちに、4本のホルンによって展開部の始まりが告げられる。展開部では、第1主題を中心に、ここまでの主要マテリアルの分割、統合、変奏によって高潮していく。展開部を通して非常に力強い楽想を見せるが、突然に失速し、ファゴットによって静かに第1主題がホ短調で再現される。それぞれの主題を一通り再現すると、コードに移り、この楽章のクライマックスを迎える。再びクラリネットとファゴットによって第1主題が奏され、低音楽器の低く暗い響きの中に楽章を閉じる。

Ⅱ. 穏やかに歌って、ある程度の自由さを持って-中庸に、動きを持って-極めて穏やかに-快活に、しかし甚だしくなく-最初のテンポで Andante cantabile, con alcuna
licenza - Moderato con anima - Andante mosso - Allegro non troppo - Tempo I

8 分の 12 拍子、複合三部形式(ABA'-Coda)の第 2 楽章は弦楽器による低い音のコラールによって始まる。このコラールは、ロ短調から次第にこの楽章の主調のニ長調に転調し、ホルンによる美しい主題を迎え入れる。ホルンのソロに続き、オーボエが優美な A 部副主題を奏する。続く部分ではこの二つの主題が同時に奏される。そしてテンポは加速し、最強奏を迎える。A 部が沈静化し、よりテンポの速い、4 分の 4 拍子、嬰へ短調の B 部に移る。B 部の主題はシンコペーションの伴奏の中で、クラリネットによって奏される。B 部はフーガによって重層的に展開され、だんだんと加速し、その頂点において、循環主題によるファンファーレが奏される。ファンファーレが止むと、ニ長調に転調し、A'部に移る。弦楽器のピチカートに乗って、A 部主題をヴァイオリンが、そして対句をオーボエが奏する。その後に、A 部と B 部のマテリアルと拍子が融合し、両方の部分の要素が同居したままに、クライマックスへと向かっていく。クライマックスの音量の指示は「ffff」であり、これは、第 2 楽章だけでなく、この作品全体で最も強い表現を求められる場面である。そして、音楽は沈静化し、クラリネットとファゴットによって、穏やかなコーダが導かれ、多幸感のうちにこの劇的な楽章を閉じる。

Ⅲ. ワルツ. 快活に、中庸に Valse. Allegro moderato

イ長調、4 分の 3 拍子の第 3 楽章は、チャイコフスキーが得意としたワルツであるが、交響曲の一つの楽章として用いているからか、工夫を凝らしているものとなっている。まず、ワルツ主題が、ヴァイオリンによって呈示されるが、ここではワルツの第 1 拍に低音楽器による伴奏が置かれていないのである。そして、嬰へ短調のトリオ部では 16 分音符による忙しいパッセージが、まるでパッチワークのように、様々な楽器によって絶えず奏され、スケルツォのような様相を呈している。そして、ワルツ部が回帰するのだが、最初のワルツ部の主題を奏し終わるまで、トリオ部のパッセージは残ったまま進行する。続くコーダでは、ファゴットとクラリネットによって、循環主題が奏される。そしてヘミオラによる部分を経て、突然に最強奏で楽章を閉じる。

IV. フィナーレ. 穏やかに、堂々と-快活に、活気を持って（2分の2拍子で）-極めて
活気を持って-非常に中庸に、そして極めて堂々と-速く Finale. Andante
maestoso - Allegro vivace (Alla breve) - Molto vivace - Moderato assai e molto
maestoso - Presto

第4楽章は、序奏付きのソナタ形式である。4分の4拍子の序奏では、ここまでの楽章で暗い雰囲気の中で奏されてきた循環主題が、ホ長調に転調し、祝祭的な雰囲気の中、堂々と奏される。そして、この序奏の中で、ファンファーレやコーラル、4分の4拍子と8分の12拍子の融合など、これまでの楽章の重要な構成要素が反芻される。そして、ト音の持続低音によって2分の2拍子、ホ短調の呈示部が導かれる。弦楽器による、非常に華やかで勢いのある第1主題と、木管楽器による、やや穏やかなニ長調の第2主題が流れるように呈示される。ニ長調のまま、展開部へと移り、やがてハ長調へと転調し、循環主題が金管楽器のファンファーレによって挿入される。そして、対位法的な展開ののちに、音楽は沈静化していき、次第にホ短調が回帰してくる。そして、突然の最強奏で、再現部へと移る。再現部では、呈示部と展開部を振り返りながら、ヘミオラやゼクエンツ、ファンファーレを交えて再現部の終わりを導いていく。そして、ホ短調5度の半終止ののちにホ長調の輝かしいコーダを迎える。コーダの前半は序奏と同じく、祝祭的な雰囲気の中で進行し、後半は、「速く Presto」の指示で勢いよく、そして極めて豪華に華々しく作品を閉じる。この楽章のクライマックスはコーダの前半であるが、ここでも第2楽章と同じ、4分の4拍子と8分の12拍子の融合がみられ、この作品全体における、第2楽章の重要性が示されている。